

その人と木 *Ia dan Pohon*

ノーマン・エリクソン・パサリブ

西野恵子 訳

ある昼、事務所の駐車場のすみっこにぼつんと立って
きつい日差しから車を守ってくれる木に、謝る人がいた。
その人は、アブラヤシ農園を営んだ祖父と、
木を切る職人は神の子だと代々信じてきた家族の代わりに謝罪した。
木は、「建物と近すぎる」という理由で、小さな頃に土から抜かれた友のことを想って、い
たみ悲しんだ。
木と友は、遠くから向かい合い、目くばせをして、考えていた。
やがて大人になったら、鳥やら蝶やらが枝や新芽に一休みしにくるだろう。
そうしたら、彼らに伝言を頼めるだろう、と。
木は、愛していると、友に言いそびれたことを悔やんだ。
友を教会に連れていき、木のように三つに枝分かれした神が見守るなか、祭壇の前で一つ
になり、やがて子どもたちが一区画ずつこの駐車場を埋めていって、将来、ここを通る人
たちに街の中の森を思わせる。そういうことがしたかった。
男は木を抱きしめ、木は彼を抱きしめた。

Sergius Mencari Bacchus (Penerbit PT Gramedia Pustaka Utama, 2016) 所収

Copyright © Norman Erikson Pasaribu

Translation copyright © Keiko Nishino